

近代スポーツと性別確認検査、トランスセクシュアル・アスリート

スポーツにおいて女であることを証明することの意味とは

井谷聡子 (オハイオ州立大学大学院)

性別確認検査、トランスセクシュアル・アスリート、近代スポーツ、クイアセオリー

まだごく少数ではあるが、世界選手権やオリンピックなどエリートレベルへのトランスセクシュアル・アスリート(TSA)の参加が見られるようになった。2004年、IOCはTSAの身体が「十分に女」または「十分に男」であることを保証するためのいくつかの条件を課した上で、その参加を認める決定を下した。ジェンダーや性差に関する研究の進展に伴って、それに関わる倫理問題が広く議論され、社会の関心や認識度も高まりつつあることを考えれば、IOCのこの決定は、驚くには当たらないだろう。

しかし、このIOCの決定は、その長い女性排除の歴史や、過去に行ってきた性別確認検査を考えると興味深いものである。1900年のパリオリンピックで初めて女性の参加が認められたが、性別による身体差が競技に直接影響しないとされるごく一部の種目を除き、男女混合で競技が行われたことは一度もない。1968年にはIOCが女性選手のみ性別確認検査を課し、その実施直後からその信頼性や人権の問題によって多くの専門家から反対意見が出されたにも関わらず、2000年までその規則が撤廃されることはなかった。その理論的根拠は、オリンピックがもたらす名誉と利益を目当てに男性選手が女性に扮して競技に参加することを防止し、競技の公平さを保証するというものであった。

ドーピング検査にも見られるこのIOCの公平さと男女分離へのこだわりを見れば、条件付きとはいえTSAのオリンピック参加を認めたのは勇氣ある決定であったと言えるだろう。義務的な性別確認検査の撤廃や、TSAに関する新たな方針などの近年の動きは、スポーツにおけるジェンダー平等達成に向けた大きな進展であるように見える。オリンピックにおける男女の参加数の差は年々縮小し、男女の競技を分離することにより、女性の参加が守られている。そしてTSAは、性転換後の性別での出場が認められるようになった。しかし、これらの近年の変化は、本当にスポーツにおけるジェンダー問題解決の進展と言えるのだろうか。

TSAの参加に関に関しては、医学的な議論は多くなされてきており、性転換手術、ホルモンセラピーの効果などは広く研究され、規則に反映されている。しかし、実際のTSAのスポーツ参加の実態はほとんど知られておらず、

彼らの参加に関するスポーツ組織の対応や議論、そこでの公平性の保障に関する研究蓄積は僅少である。よってTSAのエリートレベルでの競技参加と性別確認検査を巡る言説を分析し、そこにある身体、性差に対する認識、推定を考察することにより、近代スポーツの性差別的性質を読み解く研究の必要が浮かび上がる。本研究では、このテーマに迫る第一歩として、メジャーなスポーツ組織が公表しているTSAに関する政策文書やガイドラインなどの文書の内容分析を行い、そこに含まれる身体、性差に関する認識、議論を考察する。また同時に性別確認検査の歴史を短く振り返りながら、その性差別的性質を指摘し、また実際には完全に廃止されていないその検査が、新たに導入されたTSAに関する政策の理論的根拠と互いに矛盾しているかを検討する。

スポーツ参加への目的と理念の差から、本研究で内容分析を行った5つの文書には営利目的の組織によるものは含まれていない。具体的にはInternational Olympic CommitteeのStatement of the Stockholm Consensus on Sex Reassignment in Sports、Explanatory Note to Recommendation on Sex Reassignment and sports、International Association of Athletics FederationのIAAF Policy on Gender Verification、Australian Government、Australian Sports CommissionのTransgender in Sport、UK Sport、The Department for Culture, Media and SportのTranssexual People and Sport: Guidance for Sporting Bodies、そしてWomen's Sport FoundationのParticipation of Transsexual Athletes in Women's Sportsである。

この分析から明らかになったのは、女性が男性よりもアスリートとして劣っているという認識に基づいたfemale to maleとmale to female TSAの取り扱いの大きな相違、一見りべらるなその政策文書が男女の身体への偏見を助長し、さらなるマイノリティを生み出すものであること、さらに、間接的とはいえ、未だに実施され続けている性別確認検査とTSAに関する政策が、男の特権を守る装置として生み出された近代スポーツにとって互いに男女分離が重要であるかを暗黙のうちに提示する機能を果たしているということである。